つちのいえ

二〇一七年度前期レポート（一）

つちのいえ（前期）レポート

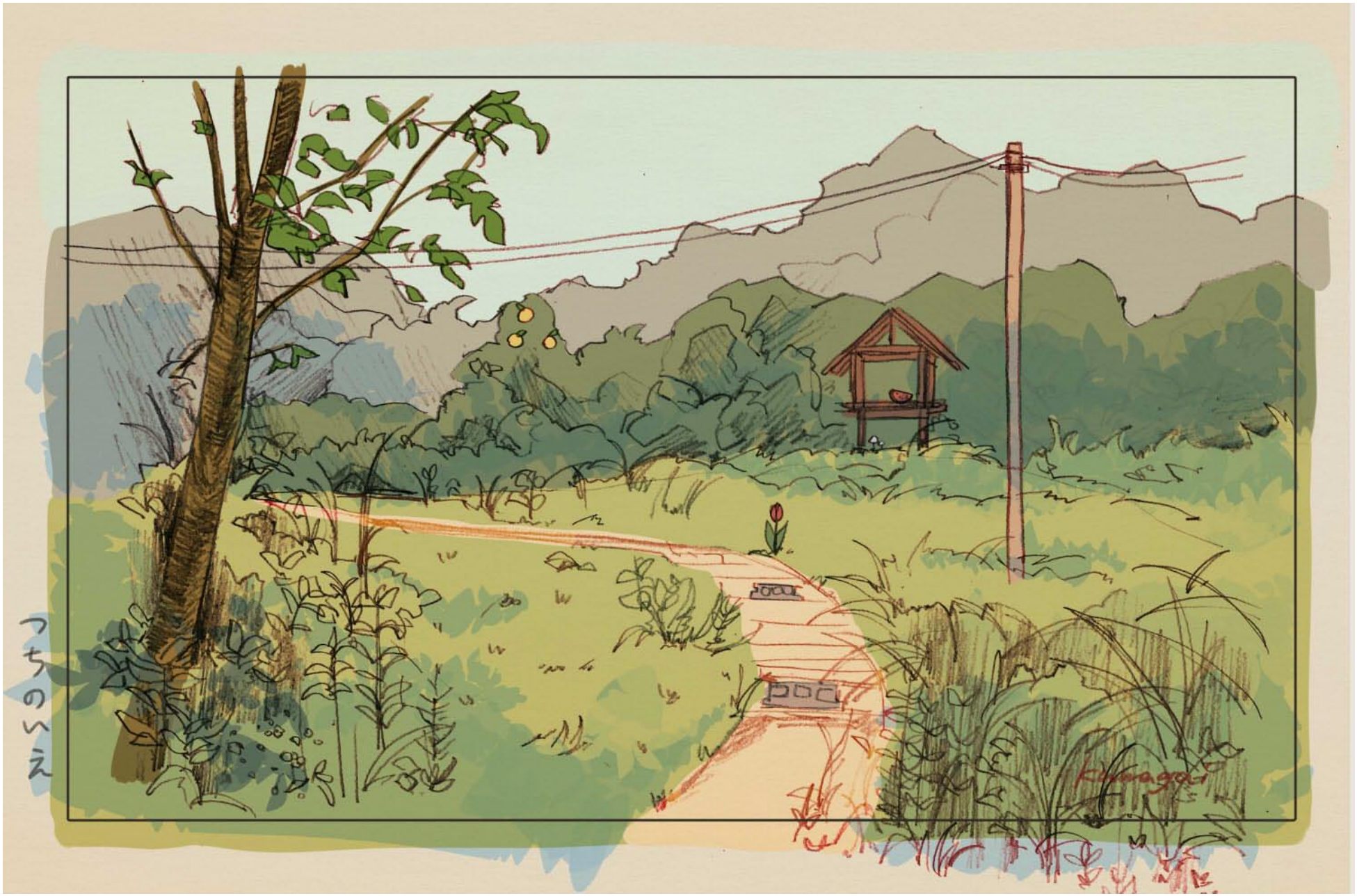
油画 3回生 15123 熊谷梨沙

私は今、制作で「あはれなり」をテーマに絵を描いています。
「あはれなり」とは「しみじみと心に深く感じられる」という意味です。月を見て「これを昔の人も見てキレイだと感じたんだなぁ…」と思ったり、川に入って「暑い時、数百年前のどこかの誰かも川に入って気持ちいいと感じたんだなぁ」と考えることも「あはれなり」に当たると思っていて「あはれなり」と感じることがとても好きです。しかし「あはれなり」は永遠ではなく、いつか無くなってしまうという儚さも持ち合わせています。この世の全ては私も含めて常に移り変わってゆく無常です。今しかないものです。そして世の中の物事（思い出など）の大半は記録されることなく消えてゆきます。その儚さが「あはれなり」の美しいところなのですが、私は少しでもそれらを絵にして残したいです。
今回、つちのいえでは たくさんの作業をして、たくさんの発見や友達との会話がありました。その中でも

- 5月頃まで周りが枯れてもずっと元気だった1りんの赤いチューリップ
- 道端の子たちが作り上げたうそのように立派な階段
- キノコ　・美味しかったポンカン(?)　・夏になるにつれて生い茂る緑
- 切られた電線　・緑のキレイな山　・遠くに感じた空

がとても印象的だったので絵にしました。

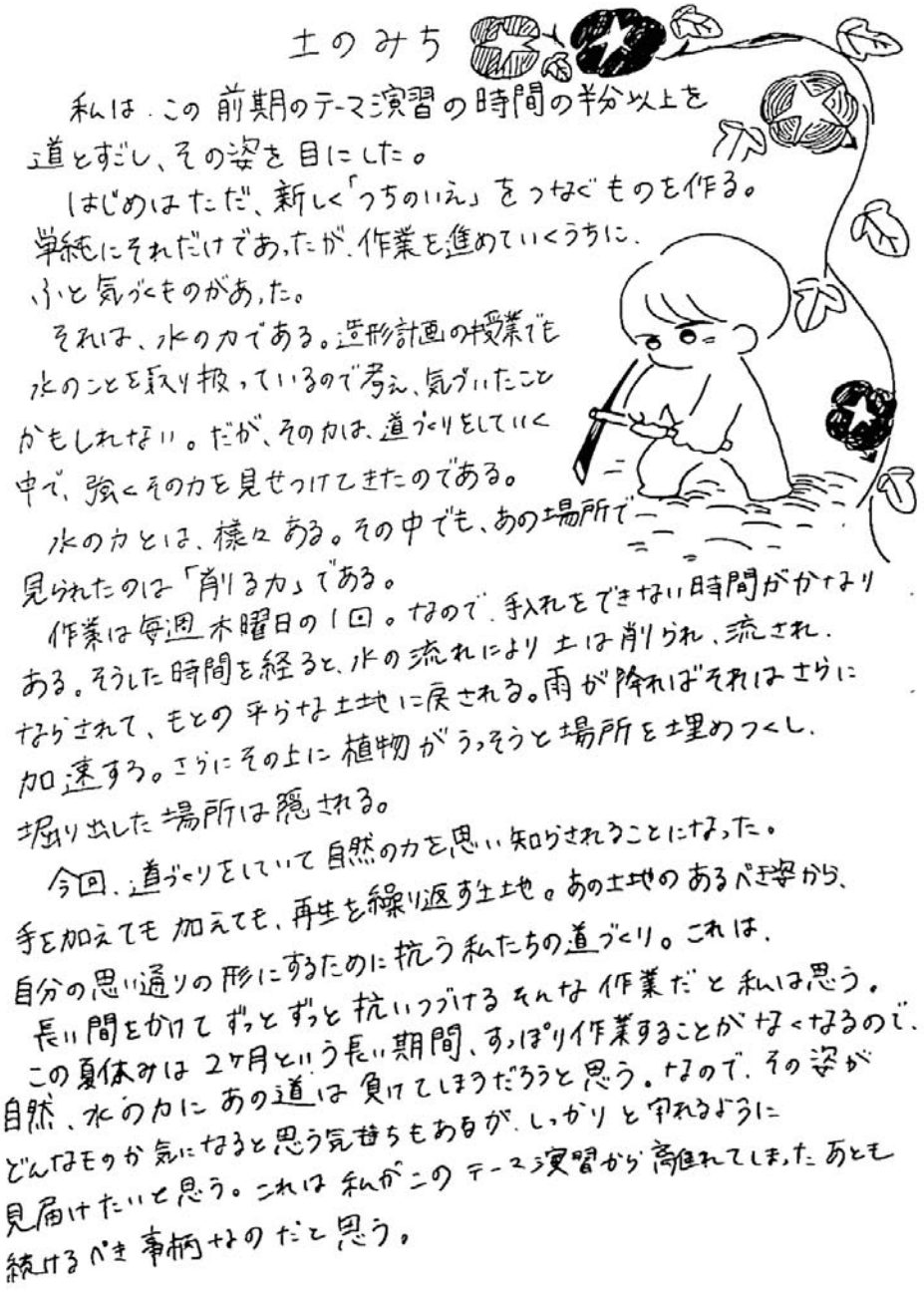
- 私が つちのいえで感じた「あはれなり」を感じていただければ幸いです。
- 視覚的なあはれなりを感じやすい「古写真バージョン」も添付してあります。



熊谷梨沙

熊谷梨沙　古写真ヴァージョン

15303 稲あゆ美



土のみち

私は、この前期のテーマ演習の時間の半分以上を道とすごし、その姿を目にした。

はじめはただ、新しく「つちのいえ」をつなぐものを作る。単純にそれだけであったが、作業を進めていくうちに、ふと気がきものがあった。

それは、水の力である。造形計画の授業でも水のことを取り扱っているので考え、気づいたことかもしれない。だが、その力は、道づくりをしていく中で、強くその力を見せつけてきたのである。

水の力とは、様々ある。その中でも、あの場所で見られたのは「削る力」である。

作業は毎週木曜日の1回。なので、手入れをできない時間がかなりある。そうした時間を経ると、水の流れにより土は削られ、流され、ならされて、もとの平らな土地に戻される。雨が降ればそれはさらに加速する。さらにその上に植物がうっそうと場所を土里めつくし、掘り出した場所は隠される。

今回、道づくりをしていて自然の力を思い知らされることになった。手を加えても加えても、再生を繰り返す土地。あの土地のあるべき姿から、自分の思い通りの形にするために抗う私たちの道づくり。これは、長い間をかけてずっとずっと抗いつづけるそんな作業だと私は思う。この夏休みは2ヶ月という長い期間、すっぽり作業することがなくなるので、自然、水の力にあの道は負けてしまうだろうと思う。なので、その姿がどんなものか気になると思う気持ちもあるが、しっかりと守れるように見届けたいと思う。これは私がこのテーマ演習から離れてしまったあとも続けるべき事柄なのだと思う。

15126 酒居瑛里佳 (美術科 油画専攻)

つちのいえでの学び

つちのいえを前期選択して感じたことは、新しいことにチャレンジしながらも伝統を守り、伝えることは日々の暮らしにおいても重要だということだ。この学びは自分にとって制作にもつながる良い経験であったと思う。

つちのいえは前期が始まり、本格的に土壁を塗る目前に風の影響をうけ倒壊してしまった。このときは写真を確認した際のショックが大きく、ここからまた再建できるのだろうかと不安があった。しかし、再スタートをきる骨組みの仕組みであったり、今までのプロセスが理解でき、結果的には得られるものが多かったと感じる。

つちのいえに続く道をつくったり、野菜をそだてたり、土壁をきづいたり、班に分かれてそれぞれでひとつのものを作り上げていく様子がとても楽しかった。鉈やノコギリで木材を切ったり加工したり、普段はなかなか使うことのない道具を使い、最初はうまく扱えず苦労した。しかし、何度か使っていくうちにコツを掴み、自分が思うように扱えるようになったことが嬉しかった。また、様々な専攻から生徒が集まってきているので、各々の知識や技術を目にすることができ、非常に刺激を受けた。つちのいえの活動を通しての、これらの経験は、これらの自分自身の生活や制作にも手助けになる充実した内容であったり、この学びを生かしていきたいと思う。

15139 瀧本 瞳（油画専攻３回生 ）

●作業内容

今期私は「いえ班」として活動した。主に以下の作業をした。

・梁の凹み、棟木の接合部を彫る
・針金で屋根の棟木に竹を固定する
・床下の土塁を作る
・床板を張る
・竹木舞にシュロ縄を巻く

屋根にする竹材は、縦半分に割られたものを上下交互に重なるように組み合わせ、針金で固定した。それをさらに左右で対にし、針金で繋いで棟木にのせていく。綺麗に加工されている竹ではないため、竹の長さ・太さ・曲がり具合などが一本一本違い、上手くはまる組み合わせを見つけるのに苦労した。竹材は意外と重量があり、思い通りに動かすのはなかなか難しかった。先生方にも手伝っていただき、最後に冠瓦 (竹) を被せて屋根が完成したときにはかなりの達成感があった。

床下の土塁は、雨水による床下の浸水を防ぐためである。長い板材を床下の斜面に合わせて置き、杭で止める。地面との隙間には小さな石を詰め、床下を掘ったときの土をその上にのせて、ハンマーなどで叩き固めていく。「土をのせて固める」を繰り返す左官のような作業はとても楽しく、徐々に下地と一体化し丈夫になっていく様子は快感だった。また、連日の雨で自然と作られた水が流れる道を利用し、土塁を伝った水が土浮庵の正面に向かって右側に流れていくように溝を掘った。

●活動を通して学んだこと

つちのいえのある丘に初めて登ったとき、「こんなにたくさんの種類の植物や昆虫が京芸にいるのか」と驚いたことを覚えている。京芸にいる虫が街中にいるものより元気で頑丈なことは百も承知だったが、これほど自然が自由に育っている環境があったとは思わなかった。４月の暖かい気候の中、動植物たちが「今、生きている」ということを直に肌に感じた。太陽が近く暑さにやられる日もあったが、丘にいると心が穏やかになり、リセットされる心地がした。これぞ「みんなが集える場」にふさわしいと思った。

私たちの活動は、作業小屋の修繕・整理と材料の調達などの環境整備から始まった。その数日後、タイミング良く (悪く) 第二のつちのいえが倒壊し、本格的な作業は再建という形でスタートした。井上先生が初めに仰っていた通り、使う材料は自然から調達したり頂き物だったりと、お金を使わず手に入れたものだった。ものを手に入れるということは、あげる側と貰う側の間に会話が生まれるということだと私は考える。その相手が人間だったら、会話から信頼関係を築いたり、交換条件を持ちかけたりして交渉が成立する。相手が自然だったら、会話せず無言でむやみに奪い取るようなことをすれば、思い通りに扱えず自分が痛い目を見る。今回、材料調達をしてくださったのは主に先生方で自分は力になれなかったが、どんなものでも店に行けば買えるという今の時代に、このような経験をできたことはとても貴重であるし、人間として生きていくために大切な精神を身に付けられたように思う。

●今後の展望

つちのいえ第二弾・土浮庵の醍醐味、土壁塗りの作業に二回とも参加できなかったことが今期のつちのいえで一番悔やまれる。後期も参加するつもりなので、残りの壁面の土塗りは積極的に行っていきたいと思う。

いえ班・にわ班の今後の作業内容としては、大きく以下のようなものが考えられる。

・土浮庵完成 (窓作り、土壁塗り、ロフトに上る階段、ロフト床板張り、装飾)
・土浮庵を取りまく庭の整備
・ツリーハウス作り
・つちのいえの屋根の吹き替え

今期の作業進度を鑑みると、これら全てを完了させるまでにはまだまだ時間がかかりそうだが、後期が終わるまでにひとまず土浮庵の完成にはたどり着きたい。また、第一のつちのいえは日本画専攻の先輩が壁画を描かれたとのことだったので、土浮庵の壁面には油画専攻で壁画 (フレスコ画) を描くことができたら面白そうだと思う。

作業を進めていく中で「もっとこうしたら面白いのではないか」「こっちの方が上手くいくのではないか」というアイデアがたくさん生まれて、つちのいえプロジェクトがどんどん面白くユニークな方向に進んでいく。それは非常に楽しいことであるし、まさに今、現場で作業していることの意味があると思う。しかし、今後はその柔軟性に加えて、「いつまでにこの作業は終わらせたい」という小さな達成目標のようなものを学生の中で立てるようにすると、作業に対する見通しが持て、集中力も高まってより充実した活動になるのではないかと思う。

オープンキャンパスや芸祭でのお披露目はあるようだが、もっと色々な人が休憩がてらにふらっと訪れられるような場所にしたいと思う。また、せっかく音楽棟の裏という好立地条件なので、ぜひ音楽学部の方たちに演奏会などの場としても利用してもらいたい。なんとか険悪な関係を打開するきっかけにならないだろうか。

後期からの活動で、季節の変化とともにつちのいえ・土浮庵のまた違った顔が見られることを楽しみにしている。

つちのいえを通して

15136 鈴木真衣子（版画専攻 3 回生）

草刈りが好きだと気付いた。溝を掘るのも好きだと気付いた。自分の手で自然に境界を作っていく､境界をどこまでにするかを決めることができるのが気持ちよかった。これはおそらく、人類が普遍的に持っている感覚で、自分の中にも人類が文明を築いてきたのと同じ喜びが存在するのだ、と掘っていた地面からふいに顔をあげて、道を見た時思った。

ここからが土の道で、ここからは草が生い茂っている場所、と決めて秩序をつくる。空間の影の形まで変えてしまう。それは爽快であると同時に、大変なことだ。沓掛の土地、まだ人の手があまり入っていない土地に手を入れる妙な責任感が作業中常につきまとい、畏れ多いと感じる瞬間も何度かあった。たとえば、階段の杭を打っている時。地面の下にはびこっている太い根を鋸で切り取った時。雨水用の溝の壁面に蟻の巣があるとわかった時。元からある秩序を荒らして、そこにまた新たな秩序を作る快感と罪悪感が同時に押し寄せてきた。つちのいえに参加しなかったらそんなことは一生わからなかったかも知れない。

つちのいえの場所は、大学ができた時、たまたま大学の端に位置してしまったために、もともとの土地が残っている貴重な場所だと思った。
フェンスの向こうはアスファルトと家があるのにここだけ山が切り取られたみたいで面白い。
土地の形をふまえて、道や階段をつくるには立体的な感覚が必要だ。丘自体がどんどん変化する立体作品のようで、飽きることが無い。道には景色の変化や歩幅のリズムが必要であることを知った。人がスムーズに歩ける階段の幅や角度があることもわかって、これはデザイン的な考え方だと思った。何度も登り降りしてスムーズに、自然に歩けるか確認した。

周囲の壁が高くて (つちのいえの道の場合植物の壁) 曲がっている道は次の瞬間に何が出てくるかわからないわくわく感がある。丘に登る前に音楽棟の前から見た時は土浮庵が上の方に建っている (まるで本当に浮いているようだ) 様子が見えるが、階段を登り出すと見えなくなって、ぐねぐね曲がって、本当に着くのだろうか、と心配になってきたところで再び現れる、そのリズムがよい。なんの前置きも無しにいきなり家が現れるのとは全く意味が違う。これはきっと、茶室の露地と同じ原理だ。坂道になっているのも、また現実から少し離れた場所にある気持ちにさせてくれる。

雨水をコントロールする作業も興味深かった。幼い頃、よく公園の砂場で水迷路を作って遊んだものだが、溝を掘る作業はそれを思い出させた。つちを掘ることは、理屈で言えない達成感を伴っていて、気付かないほど奥に眠っていた動物の本能を呼び覚ますものがあるのだろうか。雨が降った後の日、ちゃんと溝に水が流れた跡があって、まさかこんなに上手くいくとは思っていなかった。今期はそこまでできなかったが、後期はもっと大雨が降っても大丈夫なように、道の下にパイプを埋める作業がしたい。溝も時間が経つと徐々に浅くなっていくようだから、掘り直すか、もっと違う対策を考えなければならない。

草刈りは刈りすぎてもいけないし、刈らなさすぎてもいけない、なかなか神経を使う作業だった。愛らしい生えかたをしている植物を残しつつ、棘の痛い茎を切る。毎週世話をしないと維持できないのも、愛着を感じるポイントだった。今草が生い茂っている坂道も、そういえば始めは何も生えていなかった、ということを思い出してふいにぞっとしたこともある。夏の間、もし何ヵ月か人が入らなかったら、京芸なんてすぐに全体が草に覆われてしまうだろう。

つちのいえを通して、人間が自然に手を入れること抗えない楽しさを自分の内に感じた。でもそこには畏れ多さも共存している。この感覚はいつまでも、決して忘れてはならないことだ。

半年間本当に楽しかったです。ありがとうございました！

つちのいえ レポート

日本画 3 回
15133 上西 樹

今回のつちのいえを受講しようと思ったきっかけは、芸祭のメインオブジェに携わるセクトに入って、実際に建造物をつくっていく中でいろいろな発見があり、更に建築物や家にまつわることを知りたいと思ったからだ。また、芸祭で扱ったのは店で購入した、整えられた木材や、人工物が多くやりやすさを重視された作業で、今回のテーマ演習では自然物から造るということもあり、もっと多面的で面白い発見があると考えたからである。

まず初めの授業ではビデオで町全体をつくる文化に触れ、つちのあらゆる可能性を知ることができた。それを踏まえ、過去の HP を参照しながら、現段階で作られているつちのいえや、去年に作り出した 2 号のつちのいえの構想を練るところから始まり、作るにあたって幅のある話し合いがあり、ベランダや入口の構造、屋根の構造など様々な意見が飛び交い、制作にあたった。

やはり、芸祭での経験のおかげか、構造の理解や作業のスムーズさには自信があったが、思っていた通り、整備された木材や器具なしの作業となると大幅に時間や労力を消費することに気付いた。また、出来にも影響が出てくることから、ビデオで見た過去の造形物を思い浮かべ、重ねることで、文化の作り上げてきた「つち」に対する理解が深まったように思う。

特に記憶に残っているのは、土とは関係ないところではあるが、西洋の建築と日本の建築の認識の違いの話で、西洋が自然に抗い、固めて作るのに対して、日本の建築感では、自然に従い許容し、むしろそれを取り入れることで長持ちするような構造にしているという話である。たしかに、その例でみれば五重塔などがそうである。建築物の中央に心柱を用いることで、強い風が来た場合でも、風の揺れを利用し、あえて心柱が揺れるゆとりをつくることによって崩れることを防いでいる。

もう一つ感じたことといえば、専攻が集まることによる可能性である。入学した時点で、科は違えど全員が総合基礎で同じことを学び、2 回生になって専攻に別れ 1 年も経つと、やはり、一人ひとりが専攻での制作や研究によって、想像力や技術の向上があり、それがいくつもの専攻が集まることで一人では思いつかないような発想だったりが生まれる。授業中では、様々な話し合いの中で、個々が意見を出し合い、いいものが作れていったように思う。

後期では、制作の進捗も見つつの参加になるかもしれないが、自分にとって大きな経験になると感じているので、積極的に参加していきたい。

テーマ演習　土の家

美術科１５１０３安間雅人

今回、テーマ演習で土の家を取ったのは普段制作室にこもっているため外に出て自然に触れたかったからです。もう一つの理由は、自分が幼少期から泥遊びが好きだったけれど、学年が上がるたびに泥遊びをする機会がなくなり大学生になり、周りの目を気にして泥遊びができなくなっていたかである。そして土の家で泥をこね壁に塗ることで、小さい頃の泥遊びの楽しい記憶を思い出し自分の好きなことを素直にできたらと思い土の家を取ることにした。土の家を取ろうと決めた時は土の家のことを詳しく知らず、粘土を練って壁のように塗っているものという考えでここまで深い授業とは思わなかった。

第二の土の家土浮庵は一度崩壊してしまったのは悲しかった。しかしもう一度初めから作り直すのは自分にとっては得たものが多くよかったことでもあると思う。家の基礎の大切さや柱を立てる大変さ、頭の中で考えてるのでは簡単そうに思えても実際の柱は重く長かったたりし思うようにいかなかったりと、体力的に大変なことも多かった。けれど体を動かしながら今後のこと窓の配置や周りをどのようにするかなど考えるのは楽しく、始まるまではどのようにするか思い浮かばなくても体験して気づくことの方が多かった。そいて壁や入り口などは家を再建し構造を理解したことでとても考えやすかった。

土壁を塗る作業はとても楽しく始め道具で塗るのではなく手で塗るのはとても良かったと思った。手での直接的な作業は直感的に感じやすく大人になるにつれて無くなっていくことだと思うので今回体験し思い出すことができよかったとおもう。この体験は普段の授業では体験できないので今後も土の家を続けていきたいと思った。

今後のことでは、今は室内にいることが多く今どの季節なのか感じることができない、一方土の家は自然に近く季節の流れが感じやすいので季節の行事、風習のようなものを取り入れたいと思った。第一土の家は暑い壁で囲まれた空間なので土浮庵はベランダがあったり２階があったりと外への関わりを面白くできそうなので壁を作りながら考えたいと思った。

H29. 7月31日

15120　3回　日本画　　河村　紗帆

つちの家プロジェクトで感じたことは、自然の豊かさとそこから住みよい環境を作ることの難しさ、自分たちが住む家や周囲がいかに簡単な「プレハブ的」な作り方なのかということだ。

私が住む家は木造在来住宅と父に聞いた。だが、骨組みこそ木材であるものの、断熱材や外壁などには新建材が使われている。つちの家は、その名の通り「つち」でできている。竹をあみ、土にわらを入れて練った壁材を塗りこんでいく。その「原始的」ともいえる作り方が、実は父の実家と同じと聞いて驚いた。このプロジェクトにとても興味がわいた。

私が担当したのは主に道づくりだった。草ぼうぼうの「原野」と呼んでもいいような場所に鎌などの「人力」だけで立ち向かった。季節は５月から７月。強い日差しが降り注ぐ厳しい暑さのなか、汗だくになりながら「みち」を作りだした。階段をつくろうにもノウハウが分からない。先生に方法を聞きながら作業を進め、掘り起こせないような木の根っこが見つかった時は、方針変更で根っこを階段の一部に取り込むなど、目の前に現れるハードルを一つずつ飛び越えていくような楽しみを味わった。階段は３か所、全部で約２５段。一歩ずつ上り、つちの家に近づくたびに歩きやすさと、達成感を味わうことができた。

家へ向かう「みち」

つちの家プロジェクトに挑むことで、簡単には体験できない経験をすることができた。自然に人力で立ち向かうことで、初めてナタを使ったり、くい打ちをしてみたり。今まで足を踏み入れたことのない校内の奥のそのまた奥まで入ることができた。新しい道を見つけたこともあった。

知らないことでもチャレンジすればハードルを越えることができ、新しい発見があり経験値が上がっていく。つちの家プロジェクトを通して、工夫をすれば自分たちの力で乗り越えることができる、チャレンジすることの大切さを知ったことが大きかった。

今後の展望

今後の展望としては道を整備しつつ、外構工事として作成中のデッキをしっかりと完成させたい。デッキにたたずみ、森の中で過ぎていく時間を感じるのはきっと素敵だろう。まだ、一面しかできていない土壁を完成させることはもちろんだが、もろい部分をなくすために重ね塗りを行っていきたい。また、つちの家までの動線である道についてもしっかり踏み固めることでもとのような雑草だらけに戻らないようにしたい。

現在制作中のデッキ

美術科日本画専攻３回生
１５１４１　巽 史織

＊つちのいえで行った作業

私は、つちのいえで庭班として活動する予定だった。しかし実際には、初期に土浮庵の倒壊があり、作業が再建と道づくりに集中したこともあって、私はほとんどを道班として活動した。
道班としての作業は直射日光を浴びながらだったので、体力を要するものだったが、毎回の作業終了後には心地よい疲労感を感じることができた。やはり日光を浴びることは人間として必要なことだと実感し、太陽に感謝した。
さて、道班の具体的な作業内容は、主につちのいえ周辺の丘の草刈り・階段造り・側溝整備であった。私は土浮庵の再建当初は家班で作業していたので、道造り最初期の草刈りや階段造りには参加していない。従って、途中から道班の作業に合流したことになる。私が合流した時には草刈りと斜面の上の方の階段造りは終わっていて、これから側溝を掘ろうというところだった。私は、これまで使ったこともなかったツルハシを手に、側溝を掘った。ツルハシはすごかった。小さなスコップで掘るよりも効率が良かった。ただ、ツルハシは重いので使っているとすぐ疲れてしまう。そんな時は仲間と道具を交換して、別の作業をした。基本的に一人がツルハシで土を掘り、ほぐされた土を別の人がシャベルで取り除いていくというやり方で、効率化を図ることができた。さらに人がいる場合は、小さなスコップ等で側溝の壁部分を固めて成形していく作業を追加すれば、もっと早く作業ができる。このやり方をしていて、作業を分担することは重要だと感じた。
そして斜面の登り口からの階段造りが始まった。私は階段の作り方を知らなかったので、経験者に教わりながらの作業となった。杭を作り板を切る班と整地をする班とに分かれることになり、私は整地に加わった。例のごとくツルハシで掘り続ける。木の根や草の根が非常に多く、また大きな石も地面から出てきて、掘り辛かった。だが、掘り辛いということは、やりがいがあるということだ。仲間の誰かが大きな石を掘り出すたび、喜びの声があがった。掘り出した石は後で石垣造りに使うことにして、貯めておいた。木材班が帰ってきたら、いよいよ段を造る。杭打ち途中に石が埋まっていて杭の先が潰れる等ハプニングはあったが、石を掘り出して打ち直し、皆で乗り越えた。こうして階段は完成した。階段と並行して側溝造りも進めていたが、そちらも問題なく完成した。側溝の下部に石垣を造るときは、貯めておいた石を使った。石の間にペースト状にした土を塗って石を重ね、先輩と共に石垣を造った。私は、土と石と水だけで石垣ができると思っていなかったので、完成していく石垣を見て驚いた。
以上のような階段・側溝造りの他に、毎回伸びてくる草を刈った。道の両側の草むらから伸びてくる葛(?)の成長スピードが著しく、その生命力には驚くばかりであった。また、道自体からも若い芽がどんどん出てくるので、手で一つずつ抜いていたがかなり大変だった。

＊今後の展望

今後の展望として、私の中では三つ考えていることがある。
一つ目は、家造りと道造りに作業が集中したため出来なかった庭造りをすることである。
二つ目は、道自体に草が生えないように何か工夫を施すことである。人が何回も通って踏み固めることはもちろんだが、砂利のようなものを敷いても面白いのではないかと思う。
三つ目は、家や道や庭には関係ないが、大量に生えている葛を採取して葛粉を作ってみたいということである。ただしあの大量に生えている植物が本当に葛かどうか断定はできないので、詳しく観察してみる必要がある。以下にその植物の写真を載せておく。

特徴：３出複葉、つる性（つるに毛が生えている）、根本は木になる

以上

つちのいえ　レポート

15143　美術科３回　版画専攻　田村真鈴

つちのいえを通して思ったこと

つちのいえでよく聞いた言葉「使えそう」。これから、京都市立芸大における「捨てる」という行為について考えた。

京都市立芸大に入学する前、「京芸は汚い」という噂をよく耳にした。たしかに建物自体が汚れている上に古い。それだけじゃない。なんだかゴミが至る所に捨ててある。実際に入学して、正直、噂通りの場所だと感じた。ただ、暫く経つと違うように感じられるようになった。「ゴミ」が「捨てて」あるのではなく、「不要になったもの」を「置いて」あるのだ。

いろんな所に色んなものがあるのは、敷地の狭さだけが原因ではない。捨てずに置いてあるからものが増えていくのだ。「使えそう」という言葉がここでカギになると思う。芸大では、「使えそう」もしくは「使えないか？」という見方でものを見る生活を当たり前に送っている。なので、自分に不要なものも、「誰かが使うんじゃないか」と思って見る。ゴミ置き場にそれを持っていくとき、「捨てる」のではなく、「譲る」気持ちなのではないだろうか。

つちのいえでは、構築と再生を繰り返して、土が循環していた。京都市立芸大では、土だけじゃなく、様々なものが循環している。

つちのいえの感想

とても貴重な時間だったと思います。第一に、ここでしか出来ない経験だったこと。まず、生きていて、土を練ってそれを塗って壁を作るなんてことは、この授業を取らない限り、一生経験しなかったことだと思います。自分たちで考えた家を建てる。幸か不幸か、一度倒壊したことによって、柱を立てるところから家づくりを経験できました。当たり前に中ですごしている建物だけど、授業を通して、人が建てたものなのだと実感することができました。第二に他専攻と同じ時間を過ごし、ひとつのものを作ったこと。総基礎以来、他専攻と関わる機会が無くなっていました。ましてや、同じ何かを一緒に作る機会など、なかなか得ることができません。つちのいえのように、おそらく、これからも残るであろうものを作ることが出来て良かったです。何か、各専攻の技術を活かして作れたらもっと面白いものが出来たのではないかなと思います。

作ることは好きなので、とても楽しかったです。正直、制作に追われて休みたいときもありましたが、行ってみると、そんなことはすっかり忘れて作業が出来ました。少しずつ出来上がっていく道や家に毎時間感動していました。京都市立芸大が移転するまでは勿論続くと思っていますが、移転後も何らかの形で続いていってほしいと思います。

テーマ演習　土の家

15164　森美波

第二の土の家づくりは、初めての経験ばかりだった。

はじめ我々は家、庭、ジャガイモ班などに分かれ土の家の完成像を夢見ていたのだが、その矢先、春一番かと思われるほどの強風で途中までできていた土の家が倒壊し、ほぼ一からやり直す形でスタートした。というわけで、家や庭などの設計は、土の家を組み立てながら考えることとなり、初め分かれていた班も土の家倒壊によって主に家班と道班庭分かれて作業がはじまった。私が主に担当したのは、新たに下から第二の土の家へとつながる道をつくる班だった。みんなで意見を出し合いながらざっくりルート決めをし、まずハサミや鎌で人が通れるほどの幅に草を刈っていく。このとき、これから伸びてきそうなツルや、とげのある植物は根元から切っていくよう注意した。芸大の植物はたいへん元気がよく、一週間後にはもう道を覆おうとしていた。それからまた草を刈り、次のスッテプへ進んだ。

続いて階段づくりにとりかかった。傾斜が急なため、S 字型に道をつくっていったが、それでも急で上りにくかったためだ。土はクワやスコップを使い、上がりやすい高さの段差をつくり、水をかけながら固めていった。幅が狭かったり段差がありすぎたと感じた部分は満足いくまで修正した。そうして何となく階段らしきものが完成した。

次は上から流れてくる水でせっかく作った階段が崩れないようにするため、溝をつくる作業にかかった。時々顔を出すミミズと戯れながら、石を取り除いたり、溝の支えになりそうな根はそのまま置いておいた。自然と空間を共有するとはこういうことだろうか。この作業をした時期はもう夏が近づいており、汗をダラダラたらしながらの作業であったが、そのおかげで雨で階段が崩れることはなかった。

大体溝が作り終わったところで、続いては土がむき出しになった階段を横木とクイを使い土留めしていく作業に入る。木材を切り、ナタを使ってクイの先を尖らせ、ハンマーを使って 2・3 人で協力しながらクイを打っていった。ハンマーを振り下ろすのにもコツが必要で、振り下ろすとき重力に任せて振り下ろすといいらしい。また、垂直に振り下ろさないとクイが変な方向に曲がるためしっかり腰を入れて振り下ろした。一回目、クイが少し曲がってしまった。二回目、満足いく出来に。

続いて溝の仕上げに入る。階段や溝をつくったときに掘り起こした石を溝の終わりらへんに埋め込んで固めた。こうすることで、壊れにくくなる上に、見た目が石垣のようでかっこよくなった。

水が実際流れることを確認し、階段は完成した。

テーマ演習5

つちのいえ2017 前期レポート

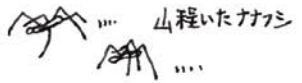
美術学部・美術学科・版画専攻　3回生
学籍番号　15161　南野薫子

テラスからの景色で俗世を忘れようとする

履修理由

やはり、つちのいえを履修した一番の理由は、野外で皆で家をつくる!!という点が魅力的だったからです。いつも屋内で閉じ込もって制作をしていると、本当に気が滅入る時があります。屋外の活動というのが必要だ!と思っていたし、他専攻の人達と土で家をつくるのも楽しそうだと思いました。自分達の思想に沿って一つのものをつくるという活動に惹かれました。あとは単純に、あの丘の上の、4~5月には桜が満開だった景色が素敵でした。良い景色は、荒んだ心を洗ってくれるような気がします。

土壁塗り



メインの土壁塗り!!…は、最後の2週しか取りかかれませんでした。(一度倒壊した時点でそんな気はしていた)ですが、ワラを混ぜて練り上げた土を触るのは、どこか懐かしい感覚がして、「昔は泥とか地面とか虫とか平気で触ってたなあ…」と思ったりしました。手に水を付けて泥を厚く重ねた所をならすと、どんどん壁が出来上がっていって、これで風や雨をしのぐものができるんだなあ…と感動しました。壁を塗りながら、窓の位置を考えたりして、「家をつくってる」という感覚を体感しました。

作業

始めの方はすぐに家に着手せずに、用具入れを作ったり、作業が上手く進んでいける工夫を数人でしていきました。普段話さない人達と話すことができてとても新鮮で、「皆で作業する」ということが久しぶりだったので楽しかったです。第2のつちのいえが一度倒れた時はショックでしたが、逆に一から建て直すという経験ができて良かったような気もします。
自然の中での作業は、夏になっていくにつれて暑くて汗だくになり、かいた汗と同じくらい、蚊に血を吸われたと思います。でも、毎週しっかりあった休憩時間が疲れた体にしっかりと効いて、メリハリのある作業の大切さを知りました。

前期を終えて

テーマ演習で初めてつちのいえを履修して、先生のおっしゃっていたことや、つちのいえプロジェクトの意味を何度も考えました。土壁や家をつくって楽しい!だけでなく、皆で、一つのものを皆の自由でつくっていくというプロセスが加わって、より考え、より工夫し、より楽しもうと思えました。また、自然やお金をかけない材料にこだわるという点でも、曲がりくねった樹を柱として使ったり、階段や道を作ったり、竹を屋根に使ったり…「遊びのように学び、つくる」ということがいかに豊かで、そしてやる気を誘うのか、ということを感じました。つちのいえを履修しないと、気付けなかったことだと思います。

つちのいえ
みちづくり

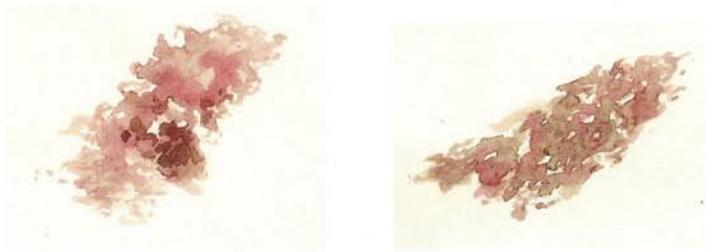
美術科日本画専攻３回
１５１６６
山部杏奈

私は今期のつちのいえで、主にみちづくりを進めた。
当初は、第二のつちのいえ“土浮庵”の再建や畑での作物栽培に興味があり、それらをやっていきたいと考えていた。
しかし今では、すっかり“みちづくり”の魅力にとりつかれてしまったのだ。

つちのいえの丘へ導く新たなみちは、土浮庵の横からはじまることになった。草を刈り、土を耕し、土地を切り拓いていく。何も無い場所から自分たちの手で、みちを一から作り上げていく。この体験には、感動があった。

みちが出来ることで、景色も変化する。
これは、私自身が絵を描くときの感覚に似ていた。

刈った草も伸び、みちの表情が毎週変化していく。朝顔のゲートもでき、これから葉やツルが茂っていくのが楽しみである。
みちは使われ、人々が歩くたびに、踏み固められて確かなものになっていった。手をかけると、それに応えてくれるようにみちは道らしくなる。
わたしはみちづくりのそういったところに惹かれた。



土留めを施した階段は、登り口方向から着手した。
機能を持たせることで、階段が形作られていくという印象だった。
普段何気なく使っているものが、どのように生まれたのかを目の当たりにしたのでした。
感動。
それらの感動体験と同時に、強い構造をつくるノウハウも学ぶことができた。
土で出来たみちを崩れさせないためにどうすればよいのか、また、木製デッキの制作方法など、この場でしか学べないことばかりである。

土のみちには溝が不可欠だ。みちづくりの三分の一は溝掘り作業だったとも言える。期間中何度も雨が降ったがこの溝がよく働き、みちも階段も無事であった。

7月13日には土浮庵班の仕事と繋がり、つちのいえの丘全体がひとつになった。

この丘が、つちのいえだけでなく、そこに辿り着くまでの道のりも訪れる人に楽しんでもらえるような空間になっていったらと思う。そのための重要なピースとしての“みち”づくりに携わることができ光栄だった。この先、一から道を作ることがあるだろうか。
そんな貴重な経験ができる環境に感謝したい。
完成した土浮庵でのスイカ茶会を楽しみにしています。

追記(7/27)　土浮庵でのスイカ茶会、とても素敵な時間でした。テラスにスイカのある風景は何とも言えず趣があり、人が集まる空間になっている感じがしました。ありがとうございました。

つちのいえ　レポート

15313　工芸科漆工専攻３回生　髙橋菜摘

私は主に道班に参加して、階段づくりなどを行った。前期の始めはあんなに草ぼうぼうで道という概念が存在しなかった場所が、３ヶ月程で楽しい道になった。それは私にとって驚きと感動をくれることだった。道をつくったことで、のぼっていきながら、いつもと違う丘の様子や、第２のつちのいえの姿が見ることができた。曲がりくねった階段を上がっていくと、緑でおおわれた秘密の場所に近づくワクワク感を感じることができるような道になって嬉しい。階段で、土が流れないように杭作りをしていて、延々と木材の先をとがらせていく作業に、思わずみんな歌いながらリズムをとって道具を振り下ろしていた。その時、高岡さんが「労働賛歌ってこうやって生まれたのかもね」と言っていたのが印象深い。確かになあ、と思った。単調なことでも、みんなで歌ってリズムよくやったら楽しく早くできる気がする。働く喜び、を感じられる。日が照る中の大変な仕事ではあったが、３時の休憩できっぱり休んで、また頑張ろうという気持ちになれた。休憩時間、みんなで飲み物や食べ物を囲んでいろいろな話をするのが楽しかった。

また、私は土班で土づくりにも参加した。第２のつちのいえが倒壊してしまった時も、塗られた土壁はびくともしていなかったのを見て、土の強さにとても驚かされた。水を入れ、藁や砂を混ぜて練り機で練っていくと、どんどん粘り気が出て機械さえも止めてしまう。できた土を触ってみるとひんやりとしていて肌に吸い付いてきて、気持ち良かった。試しに指の間に塗ってみると、食いついてはがれない。土と藁と水という自然の恵みだけを使って、こんなに丈夫なものがつくれるということを体感して、自然の力強さ、私たちは自然の恵みを受けて暮らしているのだということを改めて感じた。実際に土壁を塗ってみるとかたまりを思い切りよく打ちつけ、のばしていくのがなかなか難しくもあったが、楽しかった。土の粘り気で、伸ばしていくうちに手にもくっついてきてしまうことが何回もあった。

普段専攻で漆を触っていて、かぶれに悩まされていると、どうして触るだけでかぶれるような木の樹液を塗料にしようと思ったのだろうと考える時がある。日本人と漆の歴史は約一万二千年と長いが、人間が最初に利用し始めたのはきっといつも踏みしめていた大地、土だと思う。つちのいえをやっていると、もう少しこうしてみたら上手くやれるかも、こんなもの使ってみたら面白いんじゃない？と、ひらめきから発展していくことが多かった。そういった、現状をもっと良くできるかも、新しいことができるかもといった気持ちが土から漆、今の科学技術の発展にまでつながっている気がする。つちのいえでの活動は、そういった気持ちの原点に帰れるものであるなと感じた。後期は前期ほど関われるかは分からないが、活動を続けていきたい。

15315 中田 美波（工芸科 漆工専攻）

2017 年度 前期　つちのいえプロジェクト　レポート

４月の新学期を迎え、桜の花が散る中、つちのいえプロジェクトがスタートしました。私は工芸的なことが好きで、自然に囲まれながら作業をしたいという思いで本プロジェクトを受講しました。ここは本当に自然に恵まれていて、見たこともない虫がわんさか地面を這っています。ナナフシや、タマムシが飛んでいるのを始めて見ました。音楽棟とつちのいえの丘を隔てる雑草の成長が凄まじく、1 週間後には違う風景が出来上がっていたのです。6 月から次第に蚊が増えていき、7 月にもなると常に頭上を数匹が飛び回ります。虫よけスプレーをしても服の上から執念深く纏わりつく蚊にはお手上げです。

私ははじめ庭班に参加する予定でしたが、メンバー全体の土浮庵や道づくりを優先する意向が強かったため、それらの仕事に携わりました。結果的に今期は庭の作業は進展することなく終わってしまいましたが、個人的に、まずは土浮庵を進める過程でその雰囲気を掴みながら庭の仕組みを考える方が、より良いものができるのではないかと今は思います。つちのいえにアクセスできるよう作られた階段はきれいに整備されていて、本当に完成度が高い。私も一度みちづくりの開拓作業に参加させてもらいましたが、どのようにアプローチするか、風景や全体感をしっかり捉え考えた上で雑草を処理し、階段を配置しています。何より、雑草で塞がった急斜面を登る必要がなくなったのが嬉しかったです。土壁塗りの作業では、粘土の感触がひんやりしていて気持ちよく、まるで漆の下地を塗るような気持ち（漆の下地は素手でなくヘラで塗りますが）で夢中になっていました。竹木舞を張り、シュロ縄を巻き、土と乾し草を水で練って作った粘土を塗るという、覚えれば誰にでも作れるような手法と手順の壁づくりですが、肝心なのは「こわれない」こと。4 月末、土浮庵が強風で倒壊した時と聞いた時は驚きましたが、昨年度塗られた土壁がほとんど崩れる事なく無事だったようで、改めてそう思うと同時に、合理的な先人の知恵を実感しました。床下の土塁の玄関から侵入し、懸垂して上がるのが新しくおかしい。テラスは長さを揃えた板を等間隔に敷き、足を放り出して景色を眺めることができて快適です。東壁の床に接する部分には木の根っこで作った小窓を取り付け、そこから物を受け渡しできるようになっています。皆さんのアイデアが凝縮された形となりました。オリエンテーションで観たジェンネ旧市街のビデオでは、同じ国に住む異なる言語や能力をもつ民族が一致団結し 1 つの目的を達成しようとするように、つちのいえでは異なる専攻の人々がアイデアを引き出しあいながら作業をしていて、その本質は同じだと思いました。ここは想像を掻き立てる場所です。見渡していると、自然のものだけで何ができるかを、あれこれ考えてしまいます。私は、微力ながらもこのプロジェクトに関われたことを嬉しく思います。

「つちのいえを通し感じたこと」

15327 八尾 佳名子
(漆工専攻 三回生)

・思ったこと、考えたこと

つちのいえの存在は、以前から人づてで聞いており、オープンキャンパスなどで注目されていることも知っていた。だが、実際に参加すると自然の強さや、人とのつながりの重要性がよくわかった。つちのいえは、人から、自然から譲り受けたもので出来ている。まったくの１からというよりは、１を貰い２から自分たちで作るというように感じた。通常の生活では、いきなり２を買うことがあたりまえだが、その考えを取り払う事ができた。ホウキが無いとなれば作り、レンガがないとなれば作った。このような思考は普通に制作をしているだけでは身に付かないものではないだろうか。

前期では雨風による土壁の崩壊が、逆にリセットされ自分達で想像する余地が広がったように感じた。壊れた土壁から土を剥がすとき、思い切り金槌で殴ってもなかなか取れずあまりの頑丈さに驚いた。だが、これを雨風が倒したのだと思うと自然の強さが少し恐くなった。自然は人間に対して害を及ぼす事も多々あるが、その害から守るのは自然から作られた土壁や屋根ということが、なんだか不思議と都合がいいなと感じた。

また、棟上げ式も非常に興味深かった。自分は子供の頃に一度参加したことがあったが、当時はお菓子が貰えるだけの儀式、と思っていたが改めてこうして棟上げ式をするととても神聖なものなのだとわかった。先生が棟上げ式を終えたあとに、作品にもこのような儀式めいたものを取り入れても面白いかもしれないといっておられ、非常に面白いと感じた。

・今後について

窓のデザインも決まり、土壁も塗ったので、次は屋根裏 (ロフト ?) への階段づくりをメインにしたらどうだろうか。こちらもデザインについては決まっているので、試行錯誤しながら進めたいと思う。

また、つちのいえは、テーマ演習の中でも特異で、他にはない良さが沢山ある。その為、あの丘にまだまだつちのいえを作り、集落のようになったら面白いだろうと感じた。後期は、時間があるときに様子を見にこれたらと思う。

テーマ演習 「つちのいえ」 2017 前期 レポート

15230 VD 先攻 若林健太郎

1）つちのいえでの作業

今回のテーマ演習で、私はおもに第二のつちの家の製作に関わる家班のメンバーとして、作業に加わった。音棟裏の斜面にせり出す形で基礎までが前年度までのつちのいえで作られていて、これから具体的にどう家づくりを進めるかという案を出し、作業がしやすいよう周辺のスペースを整えるところから作業は始まった。家の補強材であった木材を外し保管しておく、材木置き場作りやもともとあった道具置き場が作業場と離れていたため、第二の家近くに道具置き場などを作った。

道具置き場は１ｍほどの道具箱で中に道具が収納でき蓋をすれば作業台となるように設計して作ったが、おもに物置台として使用されていた。蓋が開くという構造がぱっと見た印象では伝わりづらかったのかもしれない。

第二のつちの家作りに着手する前に強風で家が倒壊してしまった。原因には骨組みに屋根と一面だけ土壁が作られていたため、風の影響を受けやすくなっていたことと、作業をするにあたって、補強材を一度全て外してしまっていたことが考えられるだろう。一からの家づくりとなり、家の基礎作りから始まり、屋根の設置、床の製作が今回の家班の主な作業内容であった。

今回の家作業では、柱に筋交いを用い、市販の器具を用いるなどし、また倒れることのないよう、念入りに土台作りを行った。倒壊する前の家との違いはテラス席で今回の作業ではテラスをさらに付け足した。一間の狭いスペースだったが、外へと空間が広がることになった。また入り口は床下ということが決まり、床下をほって平らにし、にじり口のような茶室をイメージした、家づくりを行った。

屋根は前回と同じ手順で竹を上下に組んで製作し、土壁も同様竹を組み、そこにつちを塗り固めて作り、今期では一面完成し、もう一面竹を組むところまで進んだ。足元に小窓だけがあるデザインで、少し変わった印象の土壁ができたと思う。

2）今後について

道班の製作した通路と家班のテラスがこれから、合体していくので計算しきれない部分ができてくることが考えられる。人数の伴う作業となってくるので、繰り返しのすり合わせが必要だと考える。

3）反省 感想

上でも述べたが、先に家の補助材を取り外してしまったことが、つちの家の倒壊の大きな原因だと思う、見通しを持って作業の計画行うことの重要性を噛みしめる出来事だった。

手が空いた人から同時進行できる作業を探すといった自主的な製作に少しかけていたと少し感じた、特に屋根作りでは狭いスペースでの作業になり、動ける人が減るので、作業の分配などの配慮が必要だったと感じた。なかなか滞りよくできたとは思えないが、今回のつちのいえで新しい素材や作業に触れることができたのは良い経験だった。つちは手触り良くこうした素材を製作に活かせないか考えるきっかけになったと思う。結局倒壊前の状態に戻すところまでしか進まなかった感じもするが、やはりこうした木のような素材を使い大きなものを作るのは自分にあっているな、と再確認できる授業だった。

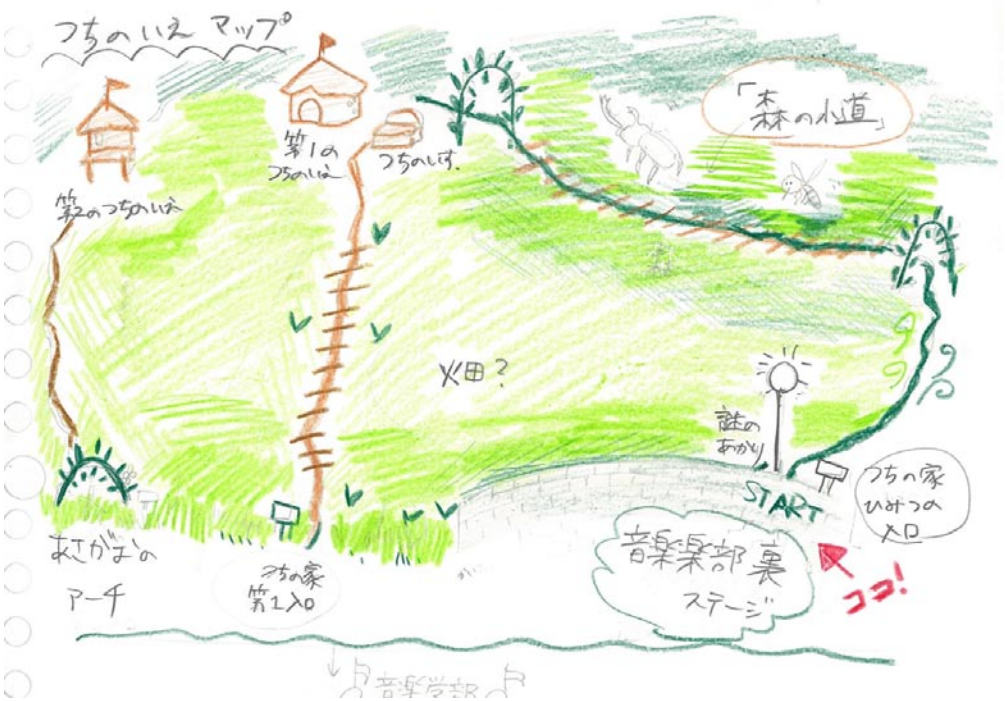
つちのいえレポート

15330 漆工 芳田佳耶子

・前期を通して思ったこと
前期で色々な作業をしましたが、最新の記憶だからか何よりも土壁塗りのことを鮮明に覚えています。私が1番衝撃的だったことは、つちでモスクを作っている映像を見た時、この土は臭いんだろうな…と感じ、匂いを覚悟して壁塗り用の土を練ったのですが、実際練ってみて、臭みのなさにとても驚きました。むしろ、砂や枯れ草を入れて適度な柔らかさに仕上がった土はいい臭いにも感じられ、人間には先入観が本当によく付きまとうんだな…と思いました。

正直倒壊したつちのいえを見たときは結構ショックで、どうすれば良いんだろう…と不安もたくさんありましたが、何とかなって本当に良かったです。

・今後の展望
音楽学部裏の謎の円形ステージから、ぐるっと迂回して第1のつちのいえに向かう森の小道を作りたいな、と友達と話しています。あまり大々的に看板を立てずに、ひっそりとして知っている人達だけが通れるようなひみつの道にするつもりです。
第1のつちのいえから、京芸を公園にしようとしていた名残の階段？を利用し、枯れ草や木でアーチを作り、どこに行くんだろう？とくぐったらつちのいえが見える、そんな道にする予定です。



つちのいえレポート

15210 城内三四郎 デザイン科 VD 専攻

今回、テーマ演習で土の家を希望したのは、粘土を触ってみたかったからだった。タイポグラフィを研究する上で、古代のひとが行ったように、粘土の上に書く、刻むということはしておいた方が良いと考えたのだ。

だが、予想以上に今年は土の家を希望する人が多く、また、土の家を作る、とうこと自体が協力をしなければならないこともあり、なかなか自分の思うように行動ができず、テーマ演習の前半は歯がゆい思いをすることがおおかった。また、土の家までの道を作っていくという一連の作業は肉体労働的な要素が強く、苦痛に感じる事もあった。また、制作などもかなりの量の課題が出たこともあり、テーマ演習に集中することができなかった。

だが、後半になり、初めて粘土を触り、日干し煉瓦を作れたのはよかった。粘土に文字を彫り込む、ということも経験できたのはとてもよかった。だが、煉瓦の使い道を考えずに中途半端な数を作っただけになってしまったのは反省点だと思う。

やはり、専攻で大量の課題が出たりなどで、土の家に集中して取り組めなかったのは非常に惜しい思うし、とくに何も作り上げていないのも気残りではあるので、残念に思う。今後は、単位に関係なく、土の家には継続して取り組んでいきたい。

学生証番号	氏名	学年	科・専攻等
14323	藤田和	4	工芸

NO.

DATE

1つずつの作業が人力だととても大変だった。倒壊した第2の土の家 土浮庵の改体からはじまった。使えるものと使えないものを選別し、使いやすいように形や大きさをあわせていく。建物というこれまで自分が作ってきたものの中で最も大きく、材が多いので、何をするにも力がいる。原始のものづくりとは生まるためのものであり、使えるものは身近にあるものと自分の体だけであったのだと感じた。柱を立て棟上げをし、少しずつ屋根をつくり、土をつくり、道をつくった。それぞれの素材と直に触れあえることが楽しかった。ここからは、再建した時の感想やその時考えたことを踏まえつつ、今後取り込んでみたいことを提案していく。

1つ目は表大移転前にしたいこととして、穴を掘る、ということをしてみたい。洞窟は人類が初めて定住した住居である。初めは自然にできた洞窟に住んでいたが次第に自分たちでつくり、竪穴式住居などに変化していく。掘るという行為も、手があればできる原子的な行為である。単純に掘るといっても、家のために掘ったり、水源を深して掘ったり、様々なパターンがある。以前、山小屋でアルバイトとした時、凍った川から水源地を掘る、ということをした。2m程凍っている雪や氷をチェーンソーで切りながら掘っていく。生きていくために必要な水を得るのがこれほど大変なことかと思った。大学では住むための洞窟を掘るのではなく、井戸を掘るのはどうかと考える。掘るという原子的な方法で生まるために必要な水を手に入れる。

2つ目は移転後の大学に植樹し育て、その木を木材にして第3、第4の土の家をつくる、というものである。今のところ、私たちが使っているのは、整材したものが、柱に切った木、竹であった。せっかく新しい場所に移るのだから、材料として木を育てるという経験もしてみたい。自分たちが使う材料がどうやって生えているのか、育っているのかを学ぶのは大切なことだし、庭や学内の植生を自由にできるチャンスである。環境デザインの生徒と、学内の庭のデザインを考え作業していくのも面白いと思う。

このように、新しい何かをつくる時に、どんな行為を何のために行うのか、材料はどのようにで生たのか、つくったものから何が得られるかを考え、リアルに実感していく授業であってほしい。

つちのいえレポート　～みちから見たつちのいえ～

油画 M1 17519 真野 綾子

・はじまり
制作で風景のドローイングをしているので、建物を観察することはしていましたが、手で作ったことはなかったので、作業を通して風景・建物の見方が変わるのではないかと思い、参加しました。
また、仕事でほぼ一日中パソコンの前に座っていたので、制作するための基礎体力が下がっており、体力向上の目的と、手や体を動かし作りたいという思いがありました。それから、共同作業が苦手なので、他専攻の方など、いろんな人と作業する事で改善したいと考えました。

・みち班へ
町中にある建物と違い、土を材料としている点に興味があったので、木で組み、近代的な方向になっていた「いえ」を作ることではなく、より土と直に触れあえそうで、何も決まっていなかった「みち」班に入りました。

・みちを作る
みちを作るためには、まずどの方向に作るか決めて、まわりや地面の雑草を刈るところから始めます。そして、土をツルハシやスコップでならし、階段を作るための段差を作ります。そうして出来た段差に、２×４の板を杭で打ち付けてとめ、すき間を土で埋めて、ならして階段の完成です。
同時に、水はけをよくする（雨で階段が流れるのを防ぐ）ため、道の横にみぞを掘ります。私はこのみぞ作りに、作業の大半を費やした気がします。
土を掘っていると、みみずやクモといった生き物や、木の根、石、土が石化したもの、が出てきます。木の根を切らないと、きれいな状態にならないので、思い切り引き抜いたり、鎌やはさみで切るときに、人間の営みの暴力性を感じました。「土と触れあう」と言うよりは、文字通り「土まみれ」でした。このとき掘り出した石が、みぞの排水に使えたり、土が別の場所で再利用できたりと、材料が循環していました。

・みちとは？
私が休んだ回に、下界（音楽棟）に到達しており、下界-みち-つちのいえ と、場所と場所を「つなげる」役割、何もないところに線を引くという「文節化」の役割がみちなのだと思いました。
みちによって風景が生まれ、人やものの往来といった動きから、村や町という単位（意味）が出来ていくのでは、と考えました。

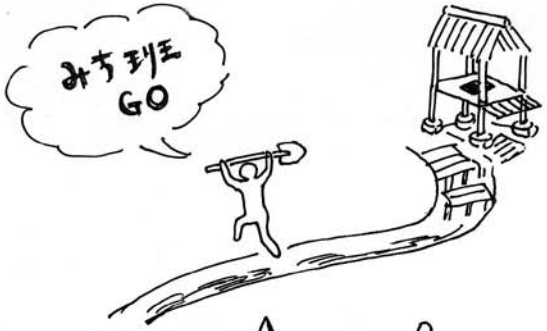
・変化したこと
① 風景の見方
制作において、これまで、町中の建物や看板といったオブジェクトに注目していたのですが、みちを作ったことで、ものともものとの関係性や、風景の生成過程に興味を広げることができました。
また、自然を切り開いて自分たちの手で作っていたので、形（もの）としての建物だけではなく、人が住んでいる場所としての意味を考えるようになりました。
自然の風景と都市の風景は対比されがちですが、明確な境界線はないのかもしれません。周辺環境とのつながりという意味では、配置上、音楽棟でばっさり分断されているので、今回作った道へ繋がる導線があると良いのでは、と思いました。（実現不可能かもしれませんが、音楽棟の前のコンクリートを壊し、飛び石がある砂利道や前庭にする。など、茶室へのアプローチのようなもの）
参加していない人には「どこにあるの？どうやって行くの？」が疑問のようです。

② 体力・体を使うこと
みちを作ることは、作業的には「刈る」「掘る」「ならす」「打つ」と、単純な行為のつみ重なりです。体のすべてを使うので、なまってしまった体の感覚を取り戻すことができました。土を掘って別の場所に移動させるという動きだけでも面白いので、作業を体験するワークショップをすると、つちのいえを知らない人も、何をしているのか分かりやすいのかなと思います。
制作したい日や暑い日は「雨が降らないかな」と考えてしまいましたが、そんな日に限って晴天でした。それでも、作業後にはすっきりした気分になっていたので、良かったと思います。

③ 共同作業
共同作業の何が苦手なのか、が分かってきました。
アイデアを考えるのは好きなのですが、それが実行段階になると、どう実現させるのがその場に合っているのか分からない、という事と、単純に自分の作業と他人の作業のつながりを忘れて没頭してしまうのが原因でした。（全て自分でやろうとするのも燃料切れにつながるので良くない）
改善には至りませんでしたが、原因が分かってよかったです。
アイデアの話は、ダムタイプのトークで聞いた「アイデア責任」という言葉とつながり、具体的に何をどうするか考え、実現させるところまでが制作者の仕事なのだと思いました。

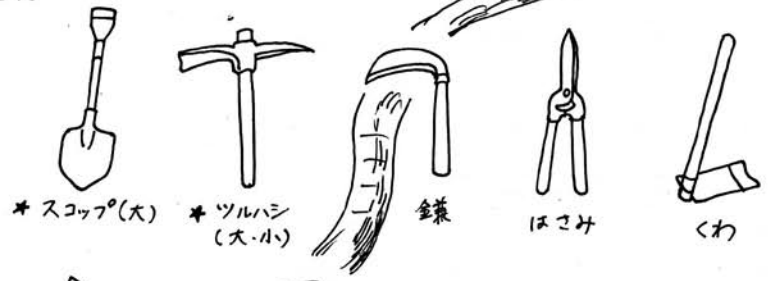
自然を相手にした他の人との共同作業なので、自分のペースだけではなく、ものごとが振り幅をもって進むところが、視界が狭まらずよかったです。

みちしシピ

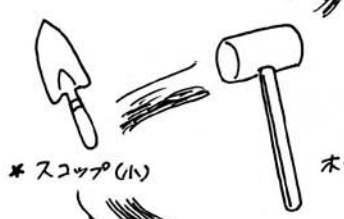


◦材料 ・土(地)
・木材・石・竹
・人力

◦道具



＊は使用頻度高



◦作り方

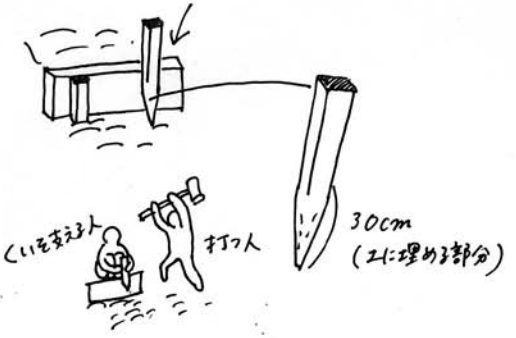
① 道を作る方向を決めて、周囲の草や木の枝、地面の雑草を鎌やはさみで刈ります。

② 道の形が見えてきたら、地面をくわやツルハシで耕し、ならします。

③ 平行して道の横にみぞを掘ります。
(道に沿わせて)

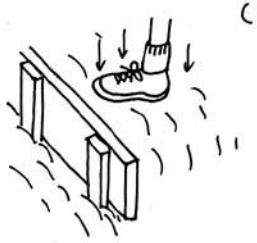
④ 階段の段差をつくる

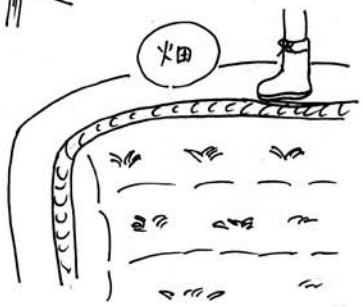
⑤ 段差に、2×4の板を杭を打ち付け、とめる。



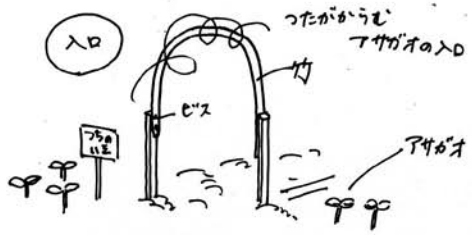
⑥ 板の上や下のすき間に土をしきつめる。

⑦ 足でならして、踏み固めて階段の完成
(つちのいえに行くとき、できるだけ人なに通ってならしてもらう)





①～⑦の工程を繰り返して下界とつちのいえをつなげる。



ムブーガ メニ (工芸の染織 M1)

私は自然に、自然的な所が好きので、家族の 3000 坪の土地に住んでいました。坂の下から見ると木ばかりがあります。子供の時、その木の植えりましたが、2012 の終わり、父の村へ行った時に同じく景色を見ました。そこから、父がコンゴの首都に微塵の村を持って来る事を分かりました。その村は、山の二千メトルの高さにあって、ルベロの地方のマセレカという村です。

それで、十年前、天然染料を使って、作品を作る事を始めました。そのため、日本に来ました。

しかし、これにも関わらずに、労働が嫌いで畑の事や改装工事はあまり興味が無かった。なぜなら、市民によって、そういう仕事は低学歴者の事と思います。多分日本にもそういう考えている人があります。キンシャサへ少額のお金で、お願いができるので、そういう道具があったら使うこととか、作業機会がないかもしれません。

でも、日本に来る前、畑で働いった時、最終大変だったので、農民に大きいな尊敬を感じました。情熱で、そういう事して、最後まで結果を待って、素晴らしいと思います。そのように、すべて作業の過程で有ると思うけど、自然の要素を扱うと自然の窺知が強いと思います。

日本来てから、特に染織研究科に入いてから、学生は自分たちですべての展示の準備をするのは吃驚しました。コンゴへも私達は作業をする時，出来れば自分でやろうと思っていますが、よく簡単に他の人にお願いする事が多いと思います。

つちのいえの授業で新しく交際術が出来て、すごく良い経験になりました。初めに、それぞれの意見を教えてもらって，班を分けていて、作業を段々して、最後まで一緒、目的によって、頑張っていました。自然にいる命を感謝する事とか手を動く事とか自然にある物でとかリユーズする事とかあなたたちと出来た事とか、色んな単語を教えてくれた、誠にありがとうございました。